



ITは動きが激しいため、
今の動きを解説する図書はない。

動向、同じ疾病の治療費の違いなどさまざまなデータから、その地域の医療の実態が見えるようになりつつある。過去の経験知を基に課題解決策を考える前に、具体的に実態を把握することが第一歩だ。ビッグデータを用いれば、施策の結果が「可観測（オブザーバル）」になることも大きなメリットだ。ある政策を実施したことでも良くなったかがわかれば、「もっとやろう」と動機付けが回る。自治体などを中心に改革する雰囲気が出てくる。ただビッグデータの解析を自治体がすべてやるのは負担が大きすぎる。われわれのようなIT専門家がデータのプラットフォームをつくり、全国の自治体の担当者や地域の人びとはそれぞれの課題の解決に頭を使う。そうした仕組みをつくる必要がある。ここでポイントは医療、行政とITの専門家が領域を超えて会話をし、一緒に考えていくことだ。

喜連川 優（きつれがわ・まさる）
データベース研究のバイオニア。文科省「情報爆発」プロジェクトを牽引（二〇〇五年―一〇年）。超巨大データベースに関する内閣府の最先端研究開発支援プログラムを主導。専門はデータ工学。東京大学大学院工学系研究科情報工学専攻博士課程修了。博士（工学）。東京大学地球観測データ統合連携研究機構長などを経て、一三年より国立情報学研究所所長。東京大学生産技術研究所教授も務める。情報処理学会会長（一三年―一四年）。紫綬褒章、レジオンドヌール勲章シュバリエをはじめ、受賞多数。

高齢者だけでなく障がい者への取り組みも重要だ。ビッグデータは、希少疾患でも力を発揮するように、一人も取り残さないロングテイル解析を可能とする。真にぬくもりのある社会の構築に貢献したい。

高い質と効率性、多様な選択肢を併せ持つ高齢者医療・介護をどのように実現すべきか。
そのための負担はどうあるべきか。

ビッグデータが一人も取り残さない ぬくもりのある社会を創る



喜連川 優

国立情報学研究所 所長
東京大学生産技術研究所 教授

現

在、社会が直面している問題は根源的に難しいものばかりである。簡単な課題は相当程度解きほぐされ、残っている課題は一筋縄ではない。エビデンスとなるデータを収集し丁寧に解析することにより糸口を見いだす以外に方法はない。学術においても、真理の解明をめざすビッグデータ基盤の重要性が強く認識されその構築が進められつつある。

市町村や医療・介護関連施設などが保

有するデータを細かく解析すると、その地域の介護・医療の課題が浮き彫りになる。まさにITの専門家の出番である。たとえば、東京大学と医療経済研究機構が三重県の自治体等と連携して医療、介護データを解析している。すると津市や四日市市では市内で医療・介護サービス^{まかな}を賄えている一方で、南部に住む人びとはかなり遠くまでサービスを受けに行っていることがわかった。ほかにも、生活習慣病の地域特性、高額医療機器の利用